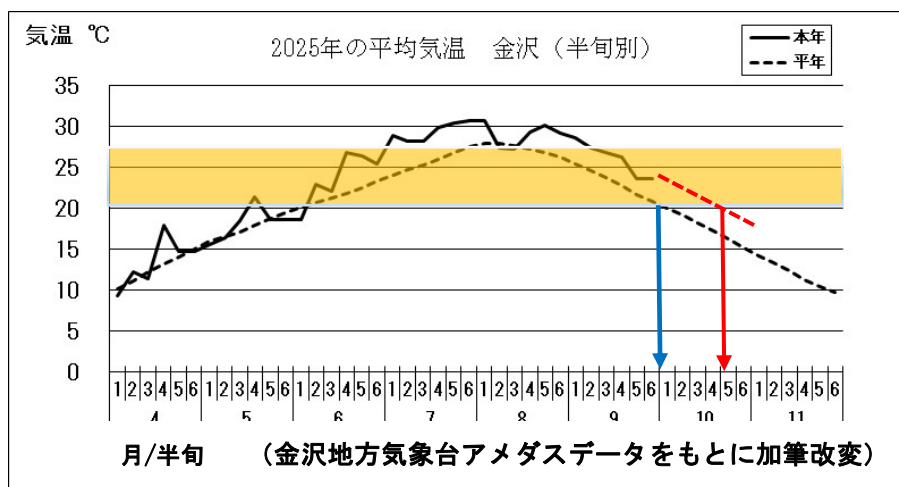
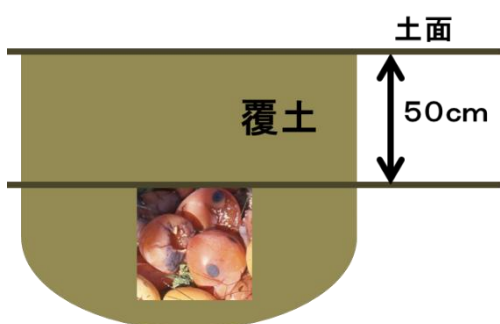
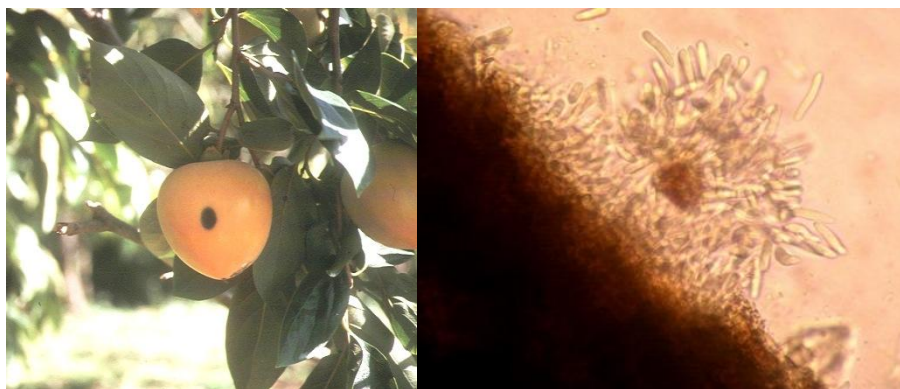


カキ炭疽病、発病果の処分について



カキ炭疽病の発生適温は20～27℃です（橙色範囲）。近年、夏季は高温傾向によって発病が顕著に抑制されています。本年は日平均気温では9月3半旬頃から発生適温になっています。平年では10月1半旬に平均気温20℃を割り込みますが（青矢印）、気象庁の予報によると向こう一か月の気温は高い確率80%です。10月いっぱい高温傾向が継続すると（赤破線）、果実の成熟、収穫期に当たる10月5半旬まで炭疽病の発生適温域にある可能性が出てきます（赤矢印）。果実には黒色円形の病斑を生じ、病斑上に大量の分生子を形成して、重大な二次伝染源になります。



樹上に発病果を放置すると、降雨時に炭疽病菌の分生子が飛散し、発病果を落としても、土面に放置すると、風雨に伴う雨滴の跳ね上がりとともに分生子が拡散します（赤矢印）。発病果は見つけ次第、樹上から撤去し、土面に放置することなく「埋却（まいきゃく）」します。「埋却」という処分方法は、50cmより深く土中に埋めることです。50cmは病原菌が活動できない深さです。50cmよりも深い穴を掘り、被害残渣を埋めた後、その上に50cm以上の覆土を行います。